

こうちミュージアム ネットワーク通信

目次

CONTENTS

- 土佐の文化財「旅壇具」……………P1
- 館長随想「連携と対話」への期待……………P2
- 文化の言葉「文化財 | PM」……………P2
- 会員紹介「安芸市立書道美術館」「黒潮実感センター」
「香南市文化財センター」「四万十市立郷土資料館」……………P3
- 現場通信「南海地震に備えた高知県の資料保存に向けて」……………P4

- 研修会「南海地震に備える」……………P5
ワークショップ「水害による被災資料の対処方法と応急処置」……………P5
- 活動報告「博物館巡回講座」……………P6
- 時の話題「植木枝盛旧邸の書齋を展示室で再現」……………P6
- 展示会批評「市原麟一郎よみがえれ土佐民話展」を観て……………P7
- 図書之窗『土佐アート街道をゆく』……………P7
- 情報コーナー／休刊の辞／会員一覧……………P8



土佐の文化財

旅壇具

平安時代 国重要文化財
金銅製 壇箱高 24.8cm 幅 40.4cm 奥行 27.1cm
金剛頂寺所蔵（高知県室戸市）

旅壇具

平成23（2011）年秋に世界ジオパークに認定された室戸は、何万年もの時空の中で自然によってもたらされた地形・地質が、目の前に見られます。その室戸の風景を平安時代の宗家である空海が、「法性の室戸といへど我が住めば 有為の波風よせぬ日ぞなき」（新勅撰和歌集）と詠んでいます。空海が若きころ修行した室戸には、空海によって開創された金剛頂寺があり、そこには重要文化財7点をはじめ、多数の宝物が現存しています。

写真はその金剛頂寺に所蔵されている旅壇具であります。旅壇具とは、密教法具（寺院で使用する道具）を携帯用に小型化したもので、壇箱の中には3個の箱で仕切られ、修法に必要な道具を全て納めることが出来るようになっていきます。修法時には、写真のように火舎・六器・飯食器・灑水器・塗香器・金剛盤・五鈴・五鈴杵などの法具を壇箱の上に配置し、左右に燈籠を備えた燈架を立てて用いられます。壇箱はやや年代が下がるものとみられますが、法具類の多くは銅鑄製挽物仕上げに鍍金を施しており、平安時代後期の旅壇具としてはわが国唯一の遺品であります。

（金剛頂寺霊宝館 坂井智空）



「連携と対話」への期待

高知市立市民図書館長 筒井秀一

平成22(2010)年度から高知市立市民図書館長となり、県市合築図書館の準備に忙殺されている。文化施設の立ち上げは高知市立自由民権記念館、高知市文化プラザかるぽーとに続き3度目になる。なお、分館である下知市民図書館も建築中である。

博物館的には、自由民権記念館、かるぽーと内の横山隆一記念まんが館、新図書館の5階に設置することも科学館(仮称)に携わることとなり、新図書館の貴重書庫の設計も関係する。3度目とはいえ、それぞれの状況があり手探り感はいなめない。

戦後多くの地方都市では文化施設も再出発を余儀なくされた。高知においても先発したのは図書館と公民館であった。高知市立市民図書館の開館は昭和24(1949)年。高知県立図書館は昭和21(1946)年臨時再開、昭和25(1950)年開館である。高度経済成長期に入ると文化への要望が強まり、昭和44(1969)年高知県立郷土文化会館が開館。これが高知県立歴史民俗資料館・平成3(1991)年、高知県立美術館・平成5(1993)年、そして建物を転用して高知県立

文学館・平成9(1997)年に発展した。

高知市立自由民権記念館が開館したのは平成2(1990)年、幡多郷土資料館(現・四万十市立郷土資料館)や安芸市立歴史民俗資料館などは先輩であった。その後、高知県立坂本龍馬記念館、高知県立埋蔵文化財センター・平成3(1991)年、土佐山内家宝物資料館・平成7(1995)年、香北町立やなせたかし記念館(現・香美市立やなせたかし記念館)・平成8(1996)年、春野町立郷土資料館(現・高知市春野郷土資料館)・平成10(1998)年、香美市立吉井勇記念館・平成15(2003)年などなど、そして、平成26(2014)年に県の新資料館、平成27(2015)年に県市新図書館・子ども科学館の開館が予定されている。

こうみてくると、公文書館がいまだに存在しないことに引っ掛かるどころではあるが、いつの間にか、高知県内にも個性的な文化施設が多彩な活動するようになった。

1990年代は現場職員の交流もそれほどではなかったように記憶しているが、平成8(1996)年「四国地区歴史系学芸員・アーキビスト

交流集会(現・四国ミュージアム研究会)」がスタートしたあたりから機運が出はじめ、「まずは『お客』だ」ということで、マスコミや大学人も声をかけ、大忘年会を開催した。この時初対面の人も多く印象深い思い出となっている。

そして、こうちミュージアムネットワークは平成13(2001)年度の「山内一豊入国四〇〇年共同企画」が高く評価され、高知県平成14(2002)年度文化施設人材育成事業において、設立検討会、アンケート調査、県内3ヶ所の意見交換会等を経て平成15(2003)年3月5日に発足した。「こうちミュージアムネットワーク設立検討会報告書」文化施設の活力は現場スタッフの力量によるところが大きいわけだが、予算的にも人数的にも、単館では何かと厳しいところがあることも事実である。また、震災・津波から収蔵資料、地域資料をいかに守っていくか、という大きい課題も目前である。こうちミュージアムネットワークのような「連携と対話」を合言葉に、県内の文化活動活性化」に取り組み組織の存在意義はますます高まっている。

文化財IPM

IPMとは、Integrated Pest Managementの略で、「総合的有害生物管理」の意です。資料を適切な環境で保存・保管することは、博物館等の主要な役割の一つです。夏季に高温多湿の気候が続く日本では、カビや害虫による被害への対策は大きな課題です。

以前は、薬剤を気化したガスを用いた燻蒸による害虫駆除や防カビ・殺菌が、主な対策として行われてきました。しかし、そのガスに用いられることの多い臭化メチルが、オゾン層破壊物質として規制の対象になり、平成17(2005)年以降、日本を含む先進国では生産・使用が全廃となりました。

これを機に、日本の生物被害対策はIPMへと移ってきました。薬剤の使用を最小限にし、環境に配慮した様々な手法を効果的に併用することで、資料のある場所に文化財害虫がいない、またカビによる目に見える被害がないレベルに維持管理することを目指しています。日常での清掃や空調管理などの環境対策や、こまめな点検が重視されています。

ちなみに、今でも行われている曝涼(虫干し)は、古くは奈良時代より、正倉院で宝物の曝涼が行われていたとの記録もあります。風を通して湿気を抜くだけでなく虫やカビの被害を受けていないかの点検の意味を持っており、IPMの基本が1000年以上も前から行われていたということになります。

(香美市立吉井勇記念館 柳瀬美紀)

文化の言葉

安芸市立書道美術館

安芸市立書道美術館は、今年で開館30年を迎えます。安芸は、川谷横雲、尚亭、手島右卿など優れた書家を数多く輩出してきました。書道の盛んなこの地に、昭和57（1982）年、先人書家の顕彰と書道振興のため、全国初の公立書道美術館が建てられました。現在、近現代の書を中心に1600点余りの作品を所蔵しています。



書道美術館では、常設展示のほか、書道振興のための活動に重点を置いています。開館の翌年から開催し今年で30回目となる全国公募の「安芸全国書展」、書道文化を次世代へ継承していくため平成16（2004）年から始まった「安芸全国書展高校生大会」、2年に1回開かれる「高知連合選抜書展」など、県内はもとより全国的にも書家の方々には広く親しまれています。

今年の秋には、「開館30周年記念所蔵作品展」を予定しています。書道美術館設立の初心を忘れず、より多くの方々に書の魅力を感じていただける美術館となるよう、一層の工夫と努力を重ねていきたいと思っています。

（安芸市立書道美術館 小林和香）

黒潮実感センター

高知県西南端にある柏島は周囲3.9km、人口約500人が住む小さな島ですが、現在は2本の橋で結ばれており半島のようになっています。柏島の海は南からの澄んだ暖流黒潮と、瀬戸内海から豊後水道を南下してくる栄養豊富な水とが混じり合うことで、日本有数のサンゴ群集が広がり、多種多様な海洋生物の宝庫となっています。なかでも生息する魚類は1000種を超え、日本一を誇ります。

NPO法人黒潮実感センターは平成10（1998）年に当時の柏島中学校（平成13年廃校）の空き教室に設立準備室を立ち上げ、平成14（2002）年にNPO法人黒潮実感センターとして設立しました。センターでは、柏島の豊かな自然環境だけでなく、そこに住む人たちの暮らしも含めて、「島が丸ごと博物館」と捉え、1、自然を実感する取り組み、2、自然を活かした暮らし作りのお手伝い、3、自然と暮らしを守る取り組みを通じて、持続可能な里海づくりを行っています。人が海からの豊かな恵みを一方的に享受するだけでなく、人もまた海を耕し、育み、守る。これが私たちが提唱した「里海」の考え方です。

これらの取り組みを地域住民や研究者、行政、NPO等と協働で行い、島を拠点に環境保全・環境教育、調査研究など海に関する活動や情報を発信し、それらを元に地域の暮らしが豊かになるお手伝いをしています。

（NPO法人黒潮実感センター センター長 神田優）



会 員 紹 介

香南市文化財センター

香南市文化財センターが「山北みかん」で知られる香我美町山北に開館したのは平成21（2009）年4月、今から3年前のことです。旧山北保育園の園舎をそのまま再生、館内には市内の遺跡から出土した土器や石器、香南5ヶ町村が収集した民具などが所せましと並んでいます。資料展示スペースは手作り感にあふれ、大昔の遺物に直接触れることができるワクワクする空間です。

仕事の中心は遺跡の発掘調査ですが、民具や民俗資料など市内の有形・無形の文化財を守り伝えていくことも当センターの大切な役割です。

平日と第4日曜日が入館無料の公開日。遺跡説明会や映像公開・土器づくり・勾玉づくりなどのイベントや出前講座を企画、地域に根ざした文化財センターを目指しています。まだまだ認知度が低いのが悩みの種。それでも、少しずつ存在が知られるようになり、毎年冬場には、昔のくらしを学ぼうと市内の小学3年生が足を運んでくれるようになりました。これから未来へと文化を担っていく主役となる子どもたちに、少しでも「文化」をリレーできれば……。

香南市文化財センターの挑戦は始まったばかりです。

（香南市文化財センター 松村信博）



四万十市立郷土資料館

市立郷土資料館は、昭和48（1973）年に「幡多郷土資料館」として開館しました。平成17（2005）年4月10日に四万十市発足に伴い「四万十市立郷土資料館」と改称し現在にいたっています。建物は、戦国時代初期の様式をもった愛知県の犬山城モデルとして建築しました。土佐藩初代藩主山内一豊の弟、康豊の居城であった中村城址に建てられました。市内でも指折りの桜の名所として市民に親しまれる「為松公園」の中にあり、天守閣（展望台）からの眺望はすばらしく四万十川、東山をはじめとし市街を一望できます。

収蔵資料は幡多郷土資料館から引き継いでいるので、幡多一円にわたり幅広く自然考古歴史芸術などさまざまな分野を展示しています。

特に、古今を遡ること約500年の昔に、応仁の乱の戦火を避けて京から下向し、中村を開き整備した前の関白一條教房及び土佐一條家にまつわる書画など。

全国でも四天王寺、法隆寺などわずかに四振を確認するのみという『七星剣』。坂本龍馬が世に出ることを早くから見抜いていた人物として近年非常に注目されている幕末勤皇の志士「樋口真吉」の日記「遺倦録」と詩画帳「南溟詩画帳」があります。詩画帳に由来する中岡慎太郎の漢詩（龍馬と共に暗殺された慶応3（1867）年の作と思われる）も一緒に展示しています。

また、近代史の中では特別な位置を占める一明治を代表する社会主義者であり、ジャーナリストとしても著名な幸徳秋水（最期は、捏造された大逆事件の首謀者として処刑される）についても、貴重な資料がご覧いただけます。

（四万十市立郷土資料館 小野雅也）

南海地震に備えた高知県の資料保存に向けて



現場通信

石巻市門脇・本間家資料レスキュー
撮影・斎藤秀一
NPO法人宮城歴史資料保存ネットワーク事務局提供

こうちミュージアムネットワーク（以下、こうちネット）では人文系文化施設を中心に、世代交代や家屋の解体、災害等、様々な原因で散逸・消滅の危険にある民間所在の歴史資料の現状に危機感を持ち、これまでその保存のあり方について議論を行ってきました。

そして東日本を襲った今回の未曾有の災害。地震による津波は、多くの人命と財産を奪うとともに、地域の共有財産である歴史資料にも甚大な被害を与えました。近い将来南海地震が起こるとされる高知県で資料保存に携わる私たちは、この惨状に衝撃を受け、同時に冒頭の歴史資料の保存問題を、これまでの「議論」から一刻も早く「行

動」に起こさなければならぬことを強く認識させられたのです。

◆研修会「東日本大震災から古文書を守る！ ―史料保全の現場から―」
（開催日／8月5日）の意義

高知県では、民間所在の歴史資料の位置づけや保存に対する各関係機関の意識は一樣でないのが現状です。このような中、今回企画した研修会は、この問題を共有するという意味において意義深いものだったといえます。

研修会は、宮城県を中心に被災資料の救出活動を行っている「NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク」（以下、宮城ネット）の理事長平川新氏（東北大学教授）を講師に迎え、宮城ネットのこれまでの活動と救出活動の現状を通じて、災害が起こる前の資料保存の重要性をお話いただきました。

宮城ネットは、平成15（2003）年の宮城県北部地震を契機に発足、その時の反省から次の災害に備え迅速に救出活動が行えるようにと、民間の資料所在情報の把握に努めてきました。「宮城方式」と呼ばれるその調査方法は、所在リストの抽出から実際の調査に至る手順をマニュアル化したもので、この方法によってこれまでに旧家425件の調査が実施されてきました。

今回の震災では、長年蓄積してきた調査データと、調査を通じて地道に築いてきた所蔵者や自治体職員らとの信

頼関係によって、円滑に救出活動が展開できたといえます。

一方で広域に及んだ被害は、大量の被災資料を生み、救出資料の保管場所の確保、保存処置後の資料の処遇等、多くの課題を浮き彫りにしました。

震災の教訓を活かしてほしいという平川氏の報告は、災害に備え私たちが今後何をすべきかという様々なヒントを教えてくださいました。

◆災害に備えた資料保存のこれからの取り組み

災害に備えた資料保存を考えていく上で現在の高知県では、大きく二つの課題があります。

一つ目は、地域や民間で継承されてきた歴史資料がどこにどの位残されているのか、その概要さえ全体的に把握されていないということです。そして二つ目は、災害時、高知県全体で組織的に被災資料の救出活動を行う体制がほとんど整っていないということです。

この二つの課題を考えていくにあたって、こうちネットの役割は大きいといえます。具体的には、行政が保護の対象とする指定品を中心とした文化財以外の資料保存の受け皿としての役割と、もう一つは災害時に現地で被災資料の救出活動にあたる実働部隊としての役割です。また今回の震災のように、災害時には県外から文化財に係わる団体や学会等が救援に駆けつけま

す。こうした中、孤立が予想される郡部の自治体や文化施設等の現場職員と県外の専門家をつなぐパイプ役としての役割も重要だと思えます。

これらの実現に向けてまず取り組むべきことは、地域の民間資料を含めた幅広い歴史資料の所在調査を実施し、その情報を集約、関係機関の中で共有を図ることです。資料所在情報が整理できれば、地域ごとに文化財の防災ハザードマップを作成することも可能です。そして最終的に目指すところは、災害時における資料保存ネットワークを高知県全体で構築していくことだと考えています。当然これらは、私たちだけで容易に実現できるものではなく、高知県・各市町村・所蔵者の理解と協力が不可欠です。

今こうちネットでは、その取り組みの第一歩として、自治体が現在管理・把握している歴史資料の所在と、その保存状況を把握するため、各自治体の文化財担当課を対象にしたアンケート調査の準備をはじめました。この調査で得た情報を基礎に、さらに地域の実情に即した形での精度の高い所在調査と、窓口となる自治体職員との関係構築につなげていきたいと考えています。

地域で紡いできた歴史や文化を災害によって途切れさせないためにも、各関係機関・団体の積極的なアンケート調査へのご協力をお願いいたします。
（土佐山内家宝物資料館 田井東浩平）

南海地震に備える

―地震のメカニズムと被害―

日時：平成23年12月13日
13時30分～15時

場所：高知県立歴史民俗資料館
講師：岡本 眞

(高知大学研究部自然科学系理学部門教授)
かねてより本県では、近いうちに起きるとされている南海地震に備え、様々な取り組みがなされてきた。しかし平成23(2011)年3月11日に発生した東日本大震災の甚大な被害を目の当たりにして、今までの地震に対する認識やその備えについて、大幅に見直す必要が出てきた。

そこで本研修会は、高知大学教授で地震地質学者の岡村眞氏をお迎えして、南海地震とは一体どういうもので、どのような被害をもたらすのかという基礎的なことを、最新の情報を踏まえて学び、各館の防災対策に活かそうと企画された。

南海地震については、想定震源域は高知県平野部を覆っており、さらに昨年末にはその範囲を拡大、地震の規模も東日本大震災と同規模のマグニチュード9.0に引き上げる中間報告が発表されることなど、新しい情報を交えて報告された。これは揺れの範囲や規模だけでなく、津波の高さの想定も拡大されたことになる。私たちは「震源域の真上に住んでいる」ということ、「1分以上の強い揺れの後に必ず津波が来る」ということを肝に銘じておく必要があるということだ。

また東日本大震災の被害者への聞き



(絵金蔵 蔵長 横田 恵)

取りについても報告された。ある会社では揺れの後、上司が床に散乱した物の整理をし始め、部下もそれに倣ったために津波にのまれてしまった事例をはじめ、「前向き」だった地震では大丈夫だった」という理由から避難せず津波の被害にあった方が非常に多かったという。大人は自分の経験を上回るものが起こったとき、なんとか「やらなくていい(逃げなくていい)」理由を探すという習性を理解したうえで、「他の人や今までの経験に命を預けない」と心得ねばなるまい。

ミュージアムではさまざまな所からお客様が訪れる。周囲の地形はおろか、避難経路もわからない方がほとんどだ。津波の到達時間が早い沿岸部の施設は特に、お客様を誘導する私たち職員の見極めが求められる。今後次々と発表される新しい情報に注意しつつ、いかに早く避難できるか対策訓練を重ねていくことが必要である。

水害による被災資料の対処方法と応急処置

―紙資料を中心に―

日時：平成24年2月14日 15時～17時

場所：山内会館
講師：松下正和

(近大姫路大学教育学部講師、
歴史資料ネットワーク副代表)
河野未央
(尼崎市立地域研究史料館嘱託職員、
歴史資料ネットワーク個人運営委員)

水害による資料の被災は、近く発生するといわれる南海地震による津波をはじめ、台風や集中豪雨による洪水など、本県でも身近に起こることが想定される自然災害と切り離すことができない。

本研修会では、阪神大震災で被災した歴史資料の保全を契機に発足し、昨年の東日本大震災でも被災資料の救出活動にあたられた、歴史資料ネットワークの松下正和氏と河野未央氏をお招きして、水損資料の対処方法や応急処置に関する知識と技術について学んだ。

まず松下氏より歴史資料ネットワークについて、平成7(1995)年の発足後から現在に至るまでの資料の救出や後方支援といった水損保全活動の報告があり、活動にあたっては復興を手伝うという姿勢で取り組まれていること、扱う資料については民間所在の歴史資料や未指定文化財であるが、それらはその地域にしかない歴史資料であり、かつ被災地の方々には身の回り

の大切な思い出そのものであること、被災する前に資料保全を考える取り組みも重要になってきていること、などの説明があった。

次に松下・河野両氏より、水没した写真プリントおよびネガの洗浄と、書籍や書類等乾燥方法について実演を交えて教わった。写真プリントについては洗浄後に撮影して画像をデータ化すると良いこと、書籍や書類などは土砂等の汚れを除去したうえで乾燥処理を行うことなどを学んだ。

続いて、水濡れ文書の乾燥処置について河野氏より説明があった後、参加者はその処置を実習した。ペーパータオル・新聞紙・マスク・ゴム手袋等を準備し、水に濡れた文書にペーパータオルをあて、上から押さえて吸水乾燥させる方法を学んだ。

実習は簡潔な処置方法に加えて身近に揃えることが可能な道具であったことから、非常に実践的な作業であった。また、歴史資料ネットワークの活動についても、被災地の資料を救出するだけでなく、被災者の方々の生活復興や未来に向けた地域創造に繋げていきたいという思いを強く受けた。今回学んだ内容を通じて、歴史資料というものがその地域にとって過去と未来とをつなぐかけがえのないものであることを改めて気付かされた研修会であった。(香美市立やなせたかし記念館 鈴木康将)

博物館巡回講座

平成23年7月～24年3月(全9回)

博物館巡回講座は、今年度が第3回目となり、7月から毎月1回、全9回開催された。これまでの2回が『龍馬伝』に絡めて、「幕末維新の土佐」という共通テーマがあったのに対し、今年度は特に共通テーマを定めず、様々な分野の話を



していただいた。内容はどの回も聞き応え十分で、非常に面白かった。アンケートの回答でも良い評価がほとんどである。異分野が連携することによって、新たな視点が生まれることがネットワークの利点でもある

ため、10月の高知城の講座などは大変面白かった。それにも関わらず、来場者数は常に15人程度と惨憺たる結果だった。ひとえに宣伝不足であるが、教育普及部会と事務局だけで広報を受け持つには限界があった。可能ならば、全分野から一人ずつ出てもらって、巡回講座専門の部会でも作った方が良かったのだろう。分野が違くと、どういう所に広報を行って良いかが分からず、広報を行う機会も少ない。

講師陣の皆さんの内容は非常に面白いだけに、やり方を変えてでも何とか存続させたい気はするが、現状では改善の方向性が見えてこないため、来年度の開催は見送らざるをえない。
(高知県立坂本龍馬記念館 三浦夏樹)

- 7月30日(土) 会場：高知市文化プラザかるぼーと
「We love やなせたかし」
田所菜穂子(香美市立やなせたかし記念館)
北 泰子(香美市立美術館)
森田 歳三(横山隆一記念まんが館)
- 8月20日(土) 会場：定福寺
「15years in 豊永郷」釣井龍秀(定福寺)
「嶺北の考古学」前田光雄(高知県立埋蔵文化財センター)
- 9月10日(土) 会場：高知市立龍馬の生まれたまち記念館
「月と海と生き物たち」京谷直喜(高知県立足摺海洋館)
「のいち動物公園の仲間たち」
仲田忠信(高知県立のいち動物公園)
- 10月15日(土) 会場：高知城
「日本屈指の古い4億年前の岩盤の上に建つ高知城」
安井敏夫(越知町立横倉山自然の森博物館)
「高知城を利用する動物たち」
谷地森秀二(四国自然史科学研究センター)
- 11月19日(土) 会場：北川村民会館
「武市半平太の手紙を読む②」
野本亮(高知県立歴史民俗資料館)
「禁門の変における土佐勤王党」豊田満広(中岡慎太郎館)
- 12月3日(土) 会場：高知県立歴史民俗資料館
「高知城下の新年行事」渡部淳(土佐山内家宝物資料館)
「干支と郷土玩具」中村淳子(高知県立歴史民俗資料館)
- 1月22日(日) 会場：高知県立文学館
「吉井勇と土佐」柳瀬美紀(香美市立吉井勇記念館)
「高知の文学の魅力」北添尚子(高知県立文学館)
- 2月18日(土) 会場：高知市立自由民権記念館
「絵金が描いた地震」横田恵(絵金蔵)
「寺田寅彦と地震」永橋禎子(高知県立文学館)
- 3月10日(土) 会場：安芸市立書道美術館
「安芸のおひなさま」門田由紀(安芸市立歴史民俗資料館)
「絵画にみる節句」後藤雅子(高知県立美術館)

二十三年度の活動報告

企画調整部会

- ・総会 6月8日、3月9日
- ・幹事会 4月27日、6月15日、8月18日、10月11日、2月14日
- ・会報誌10号編集

研修企画部会

- 研修会 ※詳細はP4・5参照
- ・東日本大震災から古文書を守る！
- ―史料保全の現場から―(8月5日)
- 講師 平川 新(NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク)
- 会場 高知県立文学館
- ・南海地震に備える ―地震のメカニズムと被害―(12月13日)
- ―水害による被災資料の対処方法と応急処置―
- ―紙資料を中心に―(2月14日)

報告会

- 東日本大震災における文化施設・文化財の被災とレスキュー活動について ―報告と問題提起―(6月8日)
- 報告者 藤田雅子(土佐山内家宝物資料館)
- 会場 高知県立美術館
- ・ミュージアム・マネジメント ―リスク・マネジメントを中心に―(1月18日)
- 報告者 田所菜穂子(香美市立やなせたかし記念館)
- 会場 山内会館

情報交換会

- 震災とミュージアム(6月8日)
- 見学会
- ・高知県立美術館の防災対策(6月8日)

教育普及部会

- ・博物館巡回講座
- ・「こうちミュージアムネットワーク」専門的職員リスト2011」作成
- ・ホームページの更新

新入会員

・香南市文化財センター

その他

- ・土佐勤王党結成150年記念特別企画
- 「土佐勤王党展 時代を変えた若き志士たち」
- 高知県立坂本龍馬記念館、高知県立歴史民俗資料館、高知市立龍馬の生まれたまち記念館、佐川町立青山文庫、中岡慎太郎館



植木枝盛旧邸の書斎を展示室で再現

平成23(2011)年、高知市立自由民権記念館では高知市桜馬場に所在した植木枝盛旧邸の書斎部分の移築復原工事をおこなった。現地保存されていた建造物を既設ミュージアムの展示室内へ移築するという工事はあまり類をみないものである。それだけに課題も多かったが、一般公開後は館の新たな目玉として好評を博している。なかでも赤い壁をはじめとする枝盛当時の書斎のきらびやかな姿は、みる者にインパクトをあたえている。

自由民権運動を代表する思想家である枝盛が、この書斎を使用した期間は約10年である。その間に書斎で書かれたものとして有名なのは、明治14(1881)年に起草された憲法草案「東洋大日本国憲案」である。この憲法草案は第二次大戦後の昭和20(1945)年、民間の憲法研究会が新憲法制定にさきがけて作成した憲法草案「憲法草案要綱」の参考に供された。そして、この「憲法草案要綱」に注目したGHQは、これを新憲法草案に反映させたのである。つまり、枝盛の思想は現行の日本国憲法のなかに生きているわけである。その憲法草案が生まれた場であることにこの書斎の歴史的意義があるといえよう。
(高知市立自由民権記念館 徳平晶)

「市原麟一郎 よみがえれ土佐民話展」を観て

いちばらりんいちろう

市原麟一郎さんは「土佐民話の会」の主宰として、高知県内の民話や民間信仰、そして戦争や災害体験の発掘・紹介・普及に尽力してこられました。本展は、平成23年に市原さんが卒寿を迎えられ、「土佐民話の会」が創立40周年、代表を務めておられる「文学館語りと紙芝居の会」も10周年ということとで平成23(2011)年9月17日(土)から11月13日(日)まで県立文学館が開催したものです。

会場のある2階へ上がると、展示室に入るまでにお地藏さんのジオラマ、民話おもちゃ、紙芝居自転車、市原さんの書齋再現と盛りだくさんの趣向で気分が盛り上がります。入り口正面には土佐市中島の力持ち仁淀川次郎兵衛の大きなイラストが「よう来たのう」という感じで出迎えてくれてこちらもにっこり。

市原さんのお仕事は膨大ですが、その中から市原さんの生い立ち、高知の神仏、戦争体験、おどけ者、紙芝居の5つにテーマを絞り、たくみにまとめられています。

民話は基本的に語りの世界なので、実物資料は、第1部を除くと民話の録音テープ、調査ノート、紙芝居、本……とうしても少なめです。そこで、南国市稲生地区のえんこうフィギュア、防空壕ジオラマ、おどけ者のイラストをハレパネ化したもの等の立体的なものを要所に配しメリハリをつけています。

また、大型パネルに力が入っています。特に第2部の「高知の神仏ご利益



めぐり」地図は、市原さんが訪ねた高知県内の神仏の数と御利益の種類イラストマップで迫力があります。市原さんのトレッドマークのベレー帽の形の中に数を書き込んでいる遊び心がほんわりした雰囲気を作っています。御利益は縁結びや病氣など6種類に色分けされ、代表的な神仏の説明もあって見えていて楽しいパネルです。実物資料が少なくてもあの手この手で来館者を楽しませる技は、文学展示で鍛えた文学館ならではの、この良くてきた展示を1回限りで終わらせるのはもったいないと、巡回展が企画されました。既に本山町立大原富枝文学館や高知市立市民図書館をはじめ、県内数ヶ所での開催が決定しているところで、ミュージアムネットワーク内の連携のあり方としても注目されます。(高知県立歴史民俗資料館 梅野光興)

窓の図書

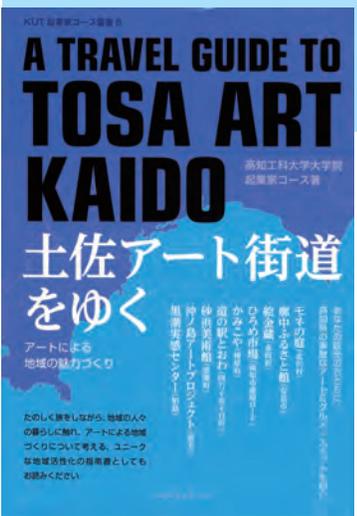
多くの観客を動員し話題となった(瀬戸内国際芸術祭2010)をはじめ、ここ数年アート・イベントによる地域の活性化事業に注目が集まっている。現代アートが持つ非日常的な面白さと、体験型観光の興隆とがうまく結びつき、今後も国内各地で「くビエナナール」や「トリエンナーレ」が開催されるそうだが、自分たちの住む場所をアートの視点で俯瞰し、これまで見えなかった魅力を再発見しようという試みは、高知県黒潮町の〈砂浜美術館〉が平成元(1989)年の発足当初から提唱していたものであった。

ご紹介する本書は、美術作家としても知られる平野真氏を中心とした高知工科大学大学院起業家コースの教員・スタッフたちが、アートや文化を触媒としてまちおこしに取り組んでいる高知県内9団体の活動を丹念に調査した記録集である。(砂浜美術館)や〈絵金蔵〉(モノの庭)〈道の駅とおわ〉等の現場で活躍するキーパーソンの肉声や、資料性の高い数字データが多く盛り込まれていて、地域の振興策

に日々頭を悩ましている自治体職員には必携の書といえるような充実の一冊である。カチカチの論文集ではなく、県内を横断するロードムービー的な構成がされているので、美術に関心がない方でも紀行文のような読後感を味わうことが出来ると思う。今回再読してみても、高知県内に高い志をもった人間がこれだけ多くいることを誇らしく感じたとともに、幸せな住処ということを思った。お金があろうが無かるうが、オシャレな都会であるうがド田舎であるうが、共に笑いあえる仲間と家族がいる場所であらうことが一番の幸せだと思ふ。モノの物差しからこのころの物差しへシフトチェンジするきっかけを、アート体験はもたらしてくれる。本書を読み進めているうちに、頁間から「はやくこっちへ来いよ」と聞こえたような気がした。

土佐アート街道をゆく -アートによる地域の魅力づくり-

(高知県立美術館学芸課チーフ 松本教仁)



高知工科大学大学院起業家コース 著 2010年 New York Art刊/1,890円

会員一覧

※平成23年度幹事館

- 安芸市立書道美術館
- 安芸市立歴史民俗資料館*
- いの町紙の博物館
- いの町立吾北中央公民館
- 絵金蔵
- 越知町立横倉山自然の森博物館
- 香美市立美術館
- 香美市立やなせたかし記念館*
- 香美市立吉井勇記念館
- 黒潮美感センター
- 高知県文化・国際課
- 高知県文化財団
- 高知県立足摺海洋館
- 高知県立坂本龍馬記念館*
- 高知県立大学総合情報センター図書館
- 高知県立図書館*
- 高知県立のいち動物公園
- 高知県立美術館*
- 高知県立文学館*
- 高知県立埋蔵文化財センター
- 高知県立牧野植物園
- 高知県立歴史民俗資料館*
- 高知こどもの図書館
- 高知市生涯学習課
- 高知市春野郷土資料館
- 高知城懐徳館
- 高知市立市民図書館*
- 高知市立自由民権記念館*
- 高知市立龍馬の生まれたまち記念館
- 香南市文化財センター
- ジョン万次郎資料館
- 子どものための民具体験館
- 金剛頂寺霊宝館*
- 佐川町立佐川地質館
- 佐川町立青山文庫
- 四国自然史科学センター
- 四万十市立郷土資料館
- 四万十町立美術館
- 定福寺土佐豊永万葉植物園
- 定福寺豊永郷土民俗資料館
- 定福寺宝物館
- 宿毛市立坂本図書館
- 宿毛市立宿毛歴史館
- 須崎市立図書館
- 竹林寺宝物館
- 土佐市立市民図書館
- 土佐山内家宝物資料館*
- 中岡慎太郎館
- 中村時計博物館
- 平和資料館草の家
- 横山隆一記念まんが館*
- 龍河洞博物館
- 龍馬歴史館
- わんぱーくこうちアニマルランド

個人会員

林 一将 (古溪城)

こうちミュージアムネットワーク通信 第10号

- 平成24(2012)年3月20日
- 編集 こうちミュージアムネットワーク企画調整部会
- 事務局 (財)高知県文化財団
- 電話 088-866-8013
- 印刷 弘文印刷(株)

※本号にお名前が記載されている方の所属・職名は平成24年3月20日現在のものです。

情報コーナー

INFORMATION

◆展示会・イベント◆

- **【高知城】**
高知城花回廊
4月6日(金)～4月8日(日)
- **【高知県立坂本龍馬記念館】**
「龍馬と加尾と収二郎」展
4月1日(日)～6月29日(金)
- 「吉田東洋と開成館」展
6月30日(土)～9月28日(金)
- 「土佐藩探索御用役」がみた幕末」展
9月29日(土)～11月11日(金)
- **【高知県立のいち動物公園】**
地球環境世界児童画コンテスト優秀作品展
4月21日(土)～5月31日(木)
- 第21回のいち動物公園写真コンテスト作品展
募集…6月1日(金)～8月31日(金) (予定)
展示…9月23日(日)～10月28日(日) (予定)
- **【高知県立美術館】**
特別展 シャガール・愛の物語
4月8日(日)～6月3日(日)
- ピカソ・タリと並ぶスペイン近代絵画の巨匠 ミロ展
7月21日(土)～9月23日(日)
- 絵師・金蔵 生誕200年記念 大絵金展
10月28日(日)～12月16日(日)
- リヒテンシュタイン 華麗なる侯爵家の秘宝
1月5日(土)～3月7日(木)
- **【高知県立文学館】**
宮尾登美子の「錦」と龍村平蔵の「美」展
4月10日(火)～5月27日(日)
- 川と文学 6月9日(土)～7月16日(月・祝)
- なばたとしたか絵本原画展
くナバランドへようこそ
7月28日(土)～9月17日(月・祝)
- 大原富枝生誕100年
「書くことは生きること展」
9月24日(月)～11月11日(日)
- **【高知県立埋蔵文化財センター】**
企画展1 考古資料からみた高知県の歴史
4月18日(水)～6月23日(土)
- 四国地区埋蔵文化財センター巡回展
第4回統一発掘へんろー四国の古代
7月2日(日)～9月8日(土)
- 企画展2 道路開発であらわれた遺跡展VI
―南国安芸道路建設に伴う発掘成果から―
9月25日(火)～12月1日(土)
- 特別展 古代の祈り
12月17日(月)～3月16日(土)
- **【高知県立牧野植物園】**
牧野富太郎 生誕150年記念 五台山花
絵巻 参の巻「春の彩り・花皿鉢」
3月3日(土)～6月10日(日)
- 五台山花絵巻 吉谷桂子プレゼンツ
ライアントー 光と風と色彩の花皿鉢
4月4日(水)～6月10日(日)
- 五台山花絵巻フラワーショー リリーガーデン
4月24日(火)～6月10日(日)
- 牧野富太郎 生誕150年記念展
「植物学者・牧野富太郎の足跡と今」
6月16日(土)～9月23日(日)
- **【高知県立歴史民俗資料館】**
蔵のなかの民具たち
4月28日(土)～6月10日(日)
- 船のおもちゃ図鑑―山崎茂さんの郷土玩具コレクションから―
- 7月20日(金)～9月2日(日)
特別展 平成24年度高知・岡山文化交流事業
刀 武士の魂
―五ヶ伝の名刀と土佐ゆかりの刀剣―
10月6日(土)～12月23日(日)
- **【高知市立自由民権記念館】**
旅する Antique LOUIS VUITTON 展
3月10日(土)～5月6日(日)
- 憲法発布と錦絵
4月28日(土)～6月10日(日)
- **【四万十町立美術館】**
アンデパンタン展(絵画の部)
4月26日(木)～5月31日(木)
- 市原麟一郎展(高知の民話・伝説)
6月8日(金)～7月22日(日)
- 美馬須美子デッサン画展
7月28日(土)～8月24日(金)
- 収蔵作品展
9月1日(土)～10月3日(水)
- **【土佐山内家宝物資料館】**
武家の理想―山内家伝来の武器武器
3月9日(金)～5月7日(月)
- 特別展 輝く文字・金泥書 古代書法の復元
―福島久幸氏資料寄贈記念―
5月11日(金)～7月9日(月)
- **【横山隆一記念まんが館】**
黒潮からのメッセージ
まんがと科学のコラボ
7月16日(月・祝)～9月17日(月・祝)
- 横山隆一・長谷川町子二人展
くフクちゃ
9月29日(土)～11月25日(日)

『こうちミュージアムネットワーク通信』休刊の辞

こうちミュージアムネットワークは、平成13(2001)年度の「山内一豊入国400周年共同企画」の成果をふまえ、平成14(2002)年度の高知県文化施設人材育成事業によつて学芸員の検討会等を経て平成15(2003)年3月5日に発足しました。本通信も、本会の情報交換・広報紙として同年8月に第1号が発刊、2年目以降は年1回発行され、本号で10号を迎えました。

平成23(2011)年度になり、事務局を担当し活動費を支出してきた(財)高知県文化財団より、公益法人への移行にともない、本会の組織や事業のあり方についていくつかの問題提起がなされ、議論の結果、臨時総会で本会の自立運営を決議しました。当面は寄附金などを活動経費にあてることになりました。

つきましては、安定した財源が期待できないため、この通信もひとまず休刊することになりました。長い間、本当にありがとうございました。通信が休刊しても、こうちミュージアムネットワークは、ますます活発に事業を行なう所存です。これからもこうちミュージアムネットワークをよろしくお願いたします。

(こうちミュージアムネットワーク会長 宅間一之)

ホームページアドレス http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/network/konet_home.html